



# 安倍晴明と井戸 その2 陰陽師たちと土木



**前回より**  
平安時代中期、安倍晴明ら官人陰陽師とは別に、民間人でも陰陽師として活動する者たちが現れていました。史料が限られており、全容を把握することはできませんが、断片的にも彼らが土木事業と深い関わりを持っていたことが示唆されています。各時代における彼らの活動の様子を見ていきましょう。

## 法師陰陽師

さて、平安時代の民間陰陽師たちは、法体をなしている者が多く、法師陰陽師と呼ばれていました。もちろん、正規の僧侶ではなく、そうした姿をしていれば徴税をごまかせるなど都合のよい理由があったからでしょう。

こうした彼らの台頭は、安倍晴明ら官人陰陽師たちの数が限られていたことが背景にあります。前回に触

れたとおり、安倍晴明は天皇や大貴族の個人的な祓や祓いを行っていましたが、その他多くの中・下級の貴族たちも同様な願いを持っており、官人陰陽師だけでは彼らの求めに応えることはできませんでした。こうして発生したのが民間陰陽師だったのです。

## 大地への畏れ

ところで、中世以前の人々は、大地を人為的に変えることは、土地の神の怒りを招くため、土木事業を行う際には、神々の怒りを鎮めなければならぬと考えていました。そして、そうした地鎮祭を行っていたのが、陰陽師たちのような特殊な力を持つと認識されていた人々でした。

院内村は、徳川家康によって天竜川流域から大井川にいたるまでの平野部に配置され、その地域における主要河川、あるいは城に隣接する場所に位置しており、新田開発と治水、城普請の地祭りや諸神事に密接に関わっていたことを示していると考えられています。

## 河原者と陰陽道の接点

ところで、こうした陰陽師系の宗教者のほかにも、占いや呪法を操る者がいました。例えば、「河原者」と呼ばれた人々は、井戸や池を掘る土木技術を持っていたと考えられ、室町時代の善阿弥のような芸術的作家「山水河原者」も生まれています。その善阿弥の嫡孫の「又四郎」は、『植樹排石沢吉凶選月日之書』という作庭に関する占い書を所持していました。

また、ある山水河原者は、「方形の庭中に一本を植えると『困』の字面に通じてよろしくない」とか、「女は陰なり、栽うるところの木は桜なり、桜は号するに花を以てす、花は春の物すなわち陽なり、陰陽相対して尤も可なり」などと述べており、明らかに陰陽思想に基づいた占法を作庭に用いていたことがわかっています。

## 土御門家の陰陽師支配

さて、いくつか民間の陰陽師ならびに陰陽師系宗教者などと土木

**秀吉による陰陽師狩り**  
文禄3年(1594)、豊臣秀吉は京都、大坂などの民間の陰陽師を、尾張の荒地開墾のために強制的に移住させる命令を出しました。これは木曾川の堤防決壊によって荒廃した田畑の復旧を目的とするものであり、「奉公も仕らず、田島もつくらざるもの」と認識されていた陰陽師たちを、労働力として使役するためでした。しかし、それだけではなく陰陽



図1:天保14年(1843)の印旛沼開削工事における黒鍬の図(酒田市立光丘文庫所蔵(寄託)/光丘文庫デジタルアーカイブ 続保定記1巻116コマ目より転載) もっこで七十貫(約262kg)もの土を担いだと書かれている

## 陰陽師たちのメリット

しかし、土御門家の支配下に入るとは、諸国の陰陽師たちにとってメリットがありました。例えば末端の陰陽師が修験者との争論に巻き込まれたおり、土御門家の江戸役所が寺社奉行に訴訟をおこした事例がみられます。

このように他教との争いなどトラブルに巻き込まれた場合、個人では対応することが困難でも、土御門家の力を借りて組織的に闘うことができました。これは権力や政治力に乏しい者たちにとっては、大きな支えになったと思われる。

また、なんといっても安倍晴明流の陰陽道を名乗れば、祈祷や占いの「売り上げ」に直結し、彼等の生活を支える上で大変重要でした。

師の持つ呪術性によって、地の神を鎮める役割も期待されていたのです。ちなみに、尾張の知多地方は、近世から近代にかけて活動した出稼ぎ土木職人である「黒鍬」の故地ですが、秀吉によって強制移住させられた陰陽師たちが、その祖先にあたると考えられています。

## 遠江の院内村

山本義孝氏の『陰陽師と山伏』によれば、遠江(現在の静岡県西部)には「院内(印内)」と呼ばれた民間宗教者たちの村が、天正11年(1583)の時点で11カ村存在していました。

「院内」とは、「大地の変更(普請)にあたって、大地の神を慰撫する呪術的役割を担っていた職人あるいは芸能人の一種」であり、遠江の院内村からは、近世中期には陰陽師や山伏といった宗教者が多数出ています。

地として有名な京都の一条戻り橋のもとにある晴明神社です。すでに江戸時代には晴明の屋敷跡として各名所図会でも紹介されていましたが、実は「愛宕山の僧」の里坊だったことがわかっていきます。ちなみに晴明の居宅があったのは、現在の京都ブライトンホテルの駐車場で、戻り橋の晴明神社はそもそも安倍晴明とは全く関係がなく、晴明ブランドを活用した世渡りの好例だったと言えるでしょう。

## 次回へ

さて、こうして彼らは安倍晴明の名の下に、各地で活動するとともに、晴明伝承もその足跡として残していったのだと考えています。

しかし、ここで疑問が残ります。なぜ、井戸に関する伝承が突出して多いのでしょうか。前述したように、陰陽師などの宗教者たちは開墾や治水、城普請、作庭など多種の土木事業に関わっています。ならば、土木に関する伝承も、種々まんべんなく伝わるのが自然で、小松和彦氏の言うように「彼らの多くは井戸掘りや土木工事にも長けて」というだけでは、説明がつかないように思えます。なぜ安倍晴明に関する伝承は、井戸に関するものが多いのか。今回は、さらに考察を進めたいと思います。(つづく)

(文:江口知秀)



写真1:京都の一条戻り橋のもとにある晴明神社(2011年撮影)

## 晴明神社の住人

そのことを端的に示すが、観光

「芦屋道満大内鑑」の芦屋道満。晴明のライバルとして有名だが、道満という名の法師陰陽師が、高階光子という中級貴族の模範を生業としていたことが確認されている